

は、36.8m/sec（北北西）1942年8月27日台風と季節風による最大風速および冬から春にかけておこる突風の累年順位は、つぎのとおりである。（1940～1959年）

第5表 台風による最大風速累年順位表

順位	1	2	3	4	5
風速	36.8	32.4	31.1	29.0	27.5
風向	北西	南々東	南々東	北々東	北々東

第6表 季節風による最大風速累年順位表

順位	1	2	3	4	5
風速	19.0	18.7	18.6	17.7	17.6
風向	北西	北西	北西	北西	北々西

第7表 冬期・春期最大瞬間風速累年順位表

順位	1	2	3	4	5
風速	26.5	26.9	25.5	25.1	24.9
風向	南	西北西	北西	北々東	北々西

8. まとめ

平戸付近において船舶の注意すべきときは、冬から春

にかけて、低気圧が東支那海、黄海から日本海にはいり、これに伴う寒冷前線が南下する時で、風向は南西から北または北西に急変し、前線の前後において瞬間風速15～20m/secの突風を伴うことが多い。これは発達した低気圧でなくても、しばしばあるので注意がいる。その後の高気圧の吹き出しによる10m/sec以上の季節風が半日から1日くらい続くことが多い。この季節風に注意することは勿論である。

7～10月の台風襲来期においては、台風が九州を縦断するか、西岸を通ると災害も記録的に増大する。1940年から1959年まで20年間の台風接近回数は54回で年平均2.7個となっている。

秋りん期には、暴風日数は春にくらべ少いが、北九州沿岸特有の北東の強風が1昼夜以上吹くことも少なく、25年11月に88時間も強風が続いたこともある。この時期にも船舶の被害、海岸地方の大波、高潮など大きな被害をおこすことがある。

以上は統計的調査の結果であるが、今後も局地的な風の特長などについて引き続き調べてみたいと思う。

参考文献

富高四郎（1959）：福岡県における下層大気中の風について，研究時報，11巻4号，p. 273—274。  
 笠村幸男（1959）：九州地方の強風について，研究時報，11巻9号，p. 789—790。

新気象学用語について

桜庭 信一

長く審議を続けてきた新気象学用語が昨年の春に事実上決定した。印刷公表されるまでにどれくらいかかるのか、文部省の事務的手続きもあるので、わかりかねるが、大部分はすでに案として関係方面に配布したものと同じだから、積極的に使っていただいて用語の混乱のないようにしたいものである。さしずめ気象集誌の和文アブストラクトは本年の1号から新用語にするつもりである。天気についてははまだ存住理事と話合っていないが、趣旨については格別の異論のないところだから、ご賛成をいただけたらと思っている。ちなみに気象庁の研究時報は一足先にこの方針で編集されていることを付記しておく。

さて新用語の案は全部の会員に配布されているわけではないから、知らないものはしょうがないとおしかりをう

けそうである。結局は文部省から気象学用語集として公刊されるまでは止むを得ないのだが、暫定的にわたしの名前で出した「気象学用語事典」でも参考にしていただければと思う（自著の自薦で恐縮だが）。

われわれの最終案が文部省での最終会議で変更をみたのはごくわずかで、次のように要約される。

案	決定
示数	指数
傾度	こう配
巻雲	巻雲（カンウンと読む）
くし型測雲器	くし形測雲器（形を表わす型はすべて形とする。ただし「寒冷前線型閉そく」のような語はそのまま）。